

## (幕別町) 町民と考えるオリンピックの町ワークショップ (第3回) 議事メモ

コーディネーター	伊藤 伸
特別ゲスト	桑井亜乃
説明担当者 (自治体)	石野郁也、甲谷英司、日下部孝彦
日時	2019年2月25日 (月) 18時30分から21時05分まで
場所	幕別町札内コミュニティプラザ (幕別町札内青葉町311-11)
その他	参加者数 (町民) 6名、(短大) 0名、(オブザーバー) 5名 欠席者数 (町民) 5名、(短大) 2名 傍聴者数 (町民) 12名、(町外) 3名、(報道) 4名

### 趣旨・概要

第3回目は、町出身のオリンピックである桑井亜乃さんに基調講演をしてもらい、その講演内容から「オリンピックの町」としての議論を行い、各参加者から改善提案シートの記入を行った。

### 第2回の振り返りと今日の進め方

#### コーディネーター

今回は、大人のスポーツについての観点を議論しようと考えていたが、桑井亜乃選手がワークショップにお越しいただいたので、30分ほどお話をいただいたうえで、「オリンピックのまちづくり」が主な論点になるかと思う。現在5人のオリンピックがいる特徴をどのように生かすかということを考えていきたい。

前回の振り返りとして、「子どものスポーツの関わり」を論点として、皆さんに話し合った。まずは、子どもがスポーツ・運動をしやすい環境をどう作っていくかということでは、子どもを中心として考えていく必要があるのではないかと意見があった。少年団であればなかなか送迎ができないので、あきらめるというケースがあり、それをどのように変えていくか。例えば、乗合について、保護者が取り決めをしたうえで運用しているという話があった。

後半は、スポーツをするだけでなく、見る・応援するということでのスポーツの関わりについて話し合った。桑井さんは、今日町内の小中学校へ出前授業をしたようだが、オリンピック選手が子どもたちの前に現れるだけで、盛り上がるし、あこがれにもなる。これが運動やスポーツの動機付けになるので、そのような場を増やしてはどうかという意見があった。また、高木姉妹のパブリックビューイングでは、ただ映像を流すだけではなく、以前通っていたスポーツクラブの方々も一緒になって応援するなど、応援しやすい環境を作ったというのも幕別町の特徴であるという話があった。

その話を受けて、皆さんが前回の改善提案シートに書いてもらい、中間とりまとめをした。皆さんが書いた課題について、「子どものスポーツの支え方」、「「する」「応援する」へ

の関心」、「スポーツ関連施設の活用方法」の3つのカテゴリーに分類した。また、それぞれの課題に対して、どのような改善策があるかということ「個人」の取組、「地域」の取組、「行政」の取組に分けて書いてもらった。

子どもの送迎が大変という課題の解決策として、個人」の取組では「自転車や公共交通機関を把握する」、「送迎の乗合」、地域」の取組では「大会や試合だけでなく、子どもの住居付近まで運送するバスの巡回」や「指導者側が同意書等を交わしたうえで送迎する」、行政」の取組では送迎に保護者が付いていくことで、集団活動のルールが守れないことから、「送り迎えを禁止とするルールを作る」、「同意書を交わすなど同乗するルールを作る」、「スクールバスの活用」といった意見があった。

子どもたちの体力の低下という課題の解決策として、個人」の取組では「少年団、部活動以外での活動の場」、「放課後や休み時間等を活用して、スポーツの時間を作る」、地域」の取組では「地域全体で協力体制をとる」といった意見があり、具体的にどのような協力体制をとるかは今後議論されていくことになる。行政」の取組では、「スポーツ施設への送迎バス」、「ノーゲームデーやノーテレビデーの逆の発想」ということで、スポーツや運動をしたらポイントがもらえるようなものというアイデアも出ていた。

希望するすべての子どもがスポーツできるための環境づくりは不十分という課題の解決策として、個人」の取組では「参加したい意思をしっかりと伝える」、「行政に頼らない自治意識を持つ」、地域」の取組では「参加したい子どもの願いを地域として叶える方策を考える」、行政」の取組では「支えあうサポート体制の確立」、高知市の事例で紹介した「子どもファンドの創設」という意見があり、参加したい子が誰でも参加できる環境づくりを町の特性にしていける必要があるという意見があった。その背景として、幕別町は全国平均から比べて、オリンピックの意識が高いので、その特徴を実践に活用していこうと話があった。

子どもの時に色々なスポーツを経験できるための仕組みづくりは、まさに総合型スポーツクラブの考え方となるものであるが、その課題の解決策として、個人」の取組では「色々なスポーツを体験してみる」、地域」の取組では「総合型スポーツクラブのような存在の親近感を沸かせるためのイベントを行う」、行政」の取組では「総合型スポーツクラブの特徴である色々なスポーツを見られる環境であることをSNSなどで情報発信する」、今日のように「オリンピックの参加をお願いする」という意見があった。

「する」「応援する」への関心から、オリンピック選手への関心を持続するためには工夫が必要という課題の解決策として、個人」の取組では「つながりのある方の紹介」、「スポーツニュースを見る」、地域」の取組では「地域としてみんなで応援、協力しあい、身内意識を醸成する」、行政」の取組では「町出身だけでなく、十勝出身のオリンピック選手や有名選手などとの接点を増やす」、「オリンピック選手を招いたイベントの開催」、「イベントや学校訪問などで子どもたちに触れるチャンスをつくる」という意見があった。民間か行政かわからないので、その他として、「スポーツCaféの開設」ということで、スポーツを応援する場を作るという意見もあった。

スポーツイベントの情報が足りないという課題の解決策として、個人の取組では「仲間に声をかける」、「どのような団体があるか確認する」、地域の取組では「スポーツ好きの仲間を作る」ということで、SNSを活用してコミュニティを作っていくという意見があった。また、行政の取組では、「メディアや広報で紹介する」という意見があり、地元新聞のスポーツ欄が大きいという話は前回出された。

スポーツに関わろうとする子どもが少ないという課題の解決策として、個人の取組では「体験会に参加する」、「ウォーキングでもやってみる」、行政の取組では「学校の授業でチームになっているスポーツをイベントに取り入れる」、「オリンピック選手が直接指導できるようなイベントや引退したスポーツ選手が指導してくれるクラブを作る」という意見があった。

スポーツ施設の活用方法の改善という課題の解決策として、個人の取組では「部活動等のスポーツを練習するためにスポーツ施設に通う」、「一度でも足を運んでみる」といったスポーツに関わることの意味があり、地域の取組では「スポーツ参加のない町民への働きかけ」、「体育施設の利用において、独占にならないように平等に使う」、行政の取組では「偏ったスポーツの使用の見直し」、「独占状態の体育館やコミセンの使用方法の見直し」といった意見があり、次回以降に実態を聞いてみたいと思う。そのほかにも「どこの施設に何のスポーツがあるのかという広報やSNSでの情報発信」という意見もあった。

その他の分類として、スポーツ指導の課題の解決策として、行政の取組では「指導者の給与を上げる」といった生活するための給与保障をすることといった意見があった。

スマイル公園の美化という課題は、直接運動するというところに結びつかないが、ウォーキングをするうえでの景観を整える意味としての意見があった。

今日は、改善提案シートの中に、「オリンピックの町幕別」が町民にも町外の人にも今まで以上に感じられるためのアイデアを今日の議論を聞いたうえで、「見る」、「する」、「応援する」という観点から記入していただきたい。

## 基調講演

### 桑井亜乃氏

まず、始めに自己紹介として、幕別町出身で平成元年生まれ、3人姉妹の末っ子である。スポーツは、小学から陸上の中長距離をメインとして、高校では、円盤投げをしていた。そのほかに冬はアイスホッケーもやっていた。

小さい頃、日本舞踊もやっていた。「日本舞踊をやっていて、現在のラグビー競技に何か役立ったものがあるか」と母がインタビューを受けた際、女性らしさや見せ方という答えを私は期待していたが、「舞台度胸」と答えていた。

ラグビーは、大学の授業で興味を持ち、大学の先生に勧められたことから始まる。また、2009年に7人制ラグビーがリオデジャネイロオリンピックで新種目に採用され、自分の中で今まで感じたことがない「やってみたい、チャレンジしてみたい」という思いで、2012

年に本格的にラグビーを始めた。また、その時期にラグビーの強化が始まったこともあり、その波に乗る形となった。これから2011年から2015年にかけての映像を流すが、最初はそのすごく下手だった。そこからの成長ぶりを見てほしい。アジア大会で5位からのスタートであったが、アジアでのオリンピック出場枠は1つしかなく、その1枠に追いつくまでの道のりの映像である。

(映像)

最初は、ボールを持たせてもらえない練習が続き、砂場を走らされたり、自衛隊と同じ訓練を受けたりしていた。それが結果に結びついたのがオリンピック出場である。練習前はプレーに余裕がないことがあったが、このようなトレーニングをすることによって、一つ一つのプレーに余裕ができ、結果として、よいプレーができるようになった。

現在、幕別町との関わりとして、幕別町の応援大使の任務を受け、応援大使の名刺を配ってもらって、いろいろな人に幕別町を知ってもらおうことをしている。そのほかにこのようなワークショップにお招きいただいたり、小中学校に訪問して授業を行ったりしている。以前、糠内小学校でラグビー体験を行った。私は現在町内に住んでおらず、皆さんと触れる機会が少ないため、このように触れる機会を与えていただいたことは感謝している。

オリンピックの存在として、私が出場する前に、現役オリンピック4人いたが、全員知っていたわけではなかった。当時の私は、オリンピックに出たいという気持ちはあったが、オリンピックに対しての執着があまりなく、幕別町に何人のオリンピック選手がいるかということ把握しきれていなかった。2018年のオリンピック選手同士が集まったイベントに参加した際、その前まで高木姉妹との関わりがあまりなかったが、イベントのおかげで知り合い、高木姉妹のオリンピック出場の時にはメッセージ交換をした。そのようなつながりができたのも、幕別町のスポーツを通じて、関わりができたのはありがたいことだった。私は小学生の頃、町内マラソン大会で記録を出したが、高木美帆さんにその記録を抜かされたという話を母から聞いて、初めて高木美帆さんの存在を知った。

幕別とスポーツということで、まず、幕別にはスポーツが自然とできる環境がある。野球場や陸上競技場、冬にはスケートリンク、アイスホッケーリンクがあり、いろいろなスポーツができる環境があると思っている。都会では、すぐそばにスポーツができる環境がなく、幕別では歩いて行ける距離にあるので、そういう面では恵まれていると思う。次にスポーツと遊びの文化がある。自然と遊びの中にスポーツが混ざっていると思う。幕別はパークゴルフの町であるため、小さな頃から遊びの中でパークゴルフをして、部活の後とかでも父と一緒にパークゴルフの勝負をして楽しく遊んでいた。家族と一緒にスポーツができたので、それが自然と身に付いてきたものがある。次にスポーツをするからには食がなくてこそだと考えている。体を大きくするにはやはり食事からだと思う。関東と比べて、北海道の方がご飯はおいしいということは得であるので、ぜひ北海道の人はもっとラグビーをやって、どんどん広げてもらえればと思う。次にスポーツ選手が身近にいることである。先ほど話があったとおり、5人のオリンピックがいることを有効活用する。高木姉妹

を含めて、身近にすごい人がいるということを感じられるようになればいいし、それをもっと広めていければいいと思う。

現在、私はアルカス熊谷に所属している。アルカス熊谷は、埼玉県熊谷市にあるクラブチームで、人数は40人ぐらいいる。下のカテゴリーには、ユースアカデミーとして小学生から高校生までの子どもがいて、その子どもが大きくなれば、私たちと同じカテゴリーで一緒にプレーするという仕組みが整っている。

どんなチームかということでは、リオデジャネイロオリンピック出場選手の13人中9人は、アルカス熊谷に所属している。全国大会ができて6年経ったが、そのうち4回はアルカス熊谷が総合優勝となっている。アルカスの由来は、日本代表のエンブレムが桜であり、そのローマ字表記「SAKURA」を逆さにすると「ARUKAS」となり、日本代表を目指すチームという意味を込められている。どのような活動をしているかということ、熊谷市の依頼を受けて、市内全小学校29校にタグラグビー教室を年1回開催している。コーチと選手が必ず毎年1回はまわることになっている。最初は、全くタグラグビーができていなかったが、この4年間で上手になり、試合もできるようになってきた。今は試合が中心になっている。今年から市内の中学校にもまわるようになった。

八木橋百貨店は、現在働いている職場で、ラグビー活動に理解がある。代表活動期間中は出張扱いとなり、出社しなくてもよいことになっている。代表活動期間以外は、午前9時半から午後1時までの出勤である。私が八木橋百貨店に入社した際、選択肢があった。市内の企業がラグビーを支援してくれるところがあり、「埼玉信用金庫」、「埼玉りそな銀行」、アイスの「赤城乳業」、ごみ収集業者、建築業者の中から職場を選んでもいいと話があった。その時、地元の皆さんに愛されている場所といえば、「デパート」であると考えて、私自身も皆さんに愛される人間になれたらと思ったこと、また「八木橋百貨店」においてラグビー活動の理解もあったことから、八木橋百貨店に就職することになった。毎年の年始の初売りには店頭で立って、福袋の販売を行っている。八木橋百貨店は、オープン20年を迎えるが、元々は呉服店であり、今でも百貨店の中に呉服店はある。オリンピック出場が決まった時、会社全体で応援してくれていて、店舗内に写真展を行ったり、横断幕にお客様からの応援メッセージをもらったりした。その横断幕は、オリンピックの会場に持って行った。

2020年の東京オリンピックに向けて、今、東京オリンピックに自信を持って出場できるのかと聞かれると、結構ぎりぎりだと思っている。そんなに日本代表になるのは甘くない。だけど、今までやってきた経験とオリンピックに対しての執念、絶対に負けない気持ちとかを含めて、オリンピックという場所は特別で、リオオリンピックの映像を今見てもワクワクするので、東京オリンピックに出場したいという気持ちはある。今日、皆さんに知ってもらったので、帰ってまた頑張ろうという気持ちになる。

これからリオの時の映像を少し流すので、みなさんに感じてもらえればと思います。

(映像)

正直、オリンピックは甘い世界ではないと実感した。ラグビーを始めた時は、リオが終わったらやめる予定であったが、リオが終わってもやめられなくなり、「ラグビーはやはり楽しい」と感じた。再びオリンピックに出て、リベンジしたいという気持ちがあり、また突き進んでいきたい。年齢を重ねるたびに、細かい動きができなくなることはあるが、経験が増えているので、わかることも増えてきた。また、この年齢になって我慢することが多く、それが食事である。おいしい食事には油ものが多く、自分も大好きであるので本当は食べたいが、食べてしまうと体のつくりや体脂肪、筋肉のコントロールができなくなるので、そのようなものを食べることを控えている。また、自分で食事のことを勉強し、アスリートフードマイスターの資格を取得した。

オリンピックに出場した時の気持ちは3年前と変わらず、またリベンジしたいという気持ちである。

### 自己紹介・基調講演の質疑

- コ) まず、今日初めて参加されたメンバーがいるので、先にそのメンバーの自己紹介を行い、その後、基調講演を聞いたうえでの質疑を行いたい。
- メ①) 第1回と第2回は、都合により参加できなかったのですが、今回は参加してみました。私が小学校の頃、リレーで全国大会第6位、中学にはスケート大会優勝をしたことがあるが、桑井さんと比べて、自分の成績は全然大したことはない。孫はいるが、スポーツをしていないようだ。
- オ①) 第1回と第2回は、仕事により参加できなかった。私は数年前に札幌でサッカーに特化したスポーツクラブで指導しており、縁があって4年前から町内のスポーツクラブで指導している。今のスポーツクラブにおいて、びっくりすることは、スポーツをやっていた保護者が多くいることである。確かにオリンピックを輩出している町であるが、それ以上に保護者もスポーツをやっていた、元を辿れば、祖父母も昔スケート選手をやっていたということも聞くことがあるため、元々アスリート文化が根強くあるのではと感じた。
- コ) 今日は、桑井さんが話していただいた「幕別とスポーツ」が大きなテーマになるが、それにこだわらず、桑井さんに質問がある方はいるか。
- メ②) ボディメンテナンスや食事の管理はどのようにされているのか。
- 桑井) 毎回の食事の写真を撮って、コーチや栄養士がネットで見られるシステムを導入している。自分で食事の写真を送っているが、過去を振り返ると、その時の変化に気づくことがある。また、朝起きたら、体温、睡眠時間と睡眠の質、疲労度をデータで入力する。トレーナーはついているが、ボディケアは行きつけのマッサージ屋で行っている。
- コ) そのシステムは、日本代表として取り入れているのか、所属チームとして取り入れているのか。

桑井) 日本代表として取り入れている。日本代表選手はそのシステムを利用し、入力データを見たうえで、その日の練習メニューを考えている。疲労度合は自己申告である。

メ③) デパートの話があったが、シーズンオフの時だけの出勤なのか。

桑井) 基本的に合宿や日本代表の活動がないときは、出勤している。日本代表の活動がないときは、午前中出勤して、午後からクラブでの活動となる。

メ③) 午前中は働き、午後からクラブ活動という二刀流の生活は大変なのは。

桑井) 私の中では、デパートは仕事という感覚がなく、リラックスするために出社しているという感じである。職場に自分のデスクはあるので、自分ができる仕事をこなしている。店内放送もすることがある。もう少し働きたいなと思ったら、時間が終わってしまう感じであるため、仕事は苦にならない。年末年始は忙しいため、1日中働くことがあり、その時はさすがに疲れる。普段、通常で働いている人はすごいなと感じる。合宿から戻ってきた時に「お帰り」と職員に声をかけられるからこそ、ラグビーを頑張れると思う。

メ④) 好きなものを食べられないというストレスをどのように解消しているのか。

桑井) 焼肉は好きで、良質のたんぱく質をとれるから、食べに行く。また、甘いものも大好きで、昔はクレープ屋があれば必ず寄っていたぐらいであったが、今は全く見向きもしない。コーヒーを飲むことには問題がないので、甘いものが食べたいと思ったら、カフェに行くことが多くなった。

メ④) 今は食べられないストレスはないのか。

桑井) 最初は食べたい欲求があって、ストレスがたまっていたが、今は食べ物に対するストレスは慣れてきたので、あまり感じない。

コ) いつ頃から食事制限を始めたか。

桑井) お恥ずかしい話であるが、ちょうど1年前ぐらい。その前までは、自分のこだわりとして、炭酸飲料だけは飲まないようにしている。年齢が上になってきて、気付かされたことも増えてきた。自分がこのようなこだわりを持つと、周りもその影響を受けるようになってきた。自分が成長するために、必要なことをやっているの、その点の我慢は苦にならないと思っている。

メ①) 桑井さんのように、幕別町出身で夏のオリンピック選手が出るとは思わなかった。十勝はスピードスケートが主流なので、冬のオリンピックなら納得するが、夏のオリンピック選手が出ることは新鮮である。

コ) 桑井さんは、元々陸上とアイスホッケーをやっていたが、主の活動はどちらだったか。夏は陸上、冬はアイスホッケーというような季節で分けていたのか。

桑井) 高校の時は、季節でスポーツを分けていた。私よりも親の方が送り迎えや食事で大変だったと思う。幕別から帯広農業高校に通学し、アイスホッケーは清水町御影にあるので、学校から御影まで送り迎えをしていた。高校から御影に着くまでの間に食事をとっていた。御影から幕別まで1時間近くかかるので、親に感謝している。

一度、陸上に集中した時期はあったが、中学と高校の6年間、ほぼこのような生活を過ごしてきた。親が送り迎えできないときは、姉にお願いすることもあったので、姉にも感謝している。姉はアイスホッケーを見ていて、自分自身もやりたくなってしまい、結局同じチームに属していた時があった。中学の頃は乗り合わせで行くこともあったが、高校は各自出発となるが多かった。

メ⑤) 桑井さんは普段も相当忙しいのではないと思うが、もし時間がもらえるのであれば、どのようなことをしてみたいか。

桑井) 3日間ぐらいであれば、温泉に行き、体を休ませたい。1週間ぐらいであれば、海外に行きたい。海外は遠征で行くことはあるが、なかなか時間が足りないので、ゆっくりと過ごすことはあまりない。

メ⑤) 過去に戻ることができるのであれば、オリンピックを目指す自分として、どの時期に戻ってみたいか。

桑井) リオオリンピックが終わった直後である。その時期はどこか体が痛い場所があるにも関わらず、日本代表に外れたくないという気持ちで必死についてきた。でも、パフォーマンスが上がっていくわけではなく、現状維持の状態でしかなかった。早い段階から手術や治療を受けたり、海外に行ってワンステップ踏んだりすることも考えられた。これからでも海外に行くことはあきらめていないので、もし海外に行くことになれば、自分の成長だけでなく、チームの成長につながるのではと思う。

メ⑤) リオオリンピックに出るまで、過ごしてきた生活に満足しているということはすごいことだと思う。

桑井) それは、タイミングと運、人の巡り合わせが見事にかみ合ったからだと思う。ラグビーを勧める先生に巡り合わなければ、オリンピックに行けなかったし、相談した親がラグビーは危ない競技だから止めなさいと言われていたら、ラグビーをやっていなかった。そして、みんなが応援してくれる環境があったからこそである。

オ②) 日本と海外のラグビーの違いは。

桑井) あまり海外で女子ラグビーをやっていることが少なく、オーストラリアとニュージーランドでクラブチームを持っているが、クラブチームの練習が週に3回程度である。でも、練習1回の集中力がすごい。

コ) 日本の女子ラグビーの競技人口は、どれくらいか。

桑井) 4,000人から5,000人ぐらいだったかと思う。私がラグビーを始めたときは、2,000人ぐらいだった。

オ①) いつも試合に出ていて、スランプになってしまったときの解決策はあるか。

桑井) 昨年、チームがスランプではないが、どんなに頑張っても、いいパフォーマンスができない時があった。その時、まず、自分の強みは何かということを考えて、その強みを明確にすることにした。自分がコントロールできない時期があるので、クラブのコーチとよく相談していたこともあった。



- オ③) ラグビーをやっていて、速いスピードでぶつかり合う恐怖感はないか。
- 桑井) 恐怖感は全くない。タックルをする恐さよりタックルをすり抜けられる恐さの方が強い。フォワードは3人、バックスが4人でスクラムを組んでいる。昨日まで沖縄で合宿をしていたが、顔の頬が少し腫れている。顔面からタックルをしたのだが、やはり痛かった。
- オ③) 先ほどの映像を見ると、やはり海外の選手は胸板が厚い選手はいるようだが、ものすごいスピードで突進してくるので、それでも恐怖感はないのか。
- 桑井) 私が恐怖に思ってしまったら、私より小さい選手はもっと恐怖に感じると思う。それを見せないように強気に見せる。特に小さい選手は狙われやすいので、それやられてしまうと自分はムカついてしまう。アイスホッケーの経験もあったからかもしれないが、今は生身の体で受けている。アイスホッケーで怖くはないですか。
- 傍聴) タックルの恐さよりも、チェックに入らなかったというミスで怒られる方が怖い。

#### ワークショップ (協議)

- コ) このあたりから、幕別町とのかかわりについて話していきたい。先ほどの休憩時間で桑井さんと話をしている、どれくらい幕別町に帰ってきているかと聞いてみたら、結構このような機会でもらい、帰省する頻度が増えているようである。また、他の選手ではあまりそのようなことは少ないと聞いた。幕別町は、すでにオリンピック選手と町とのかかわりをかなり積極的にやろうとしているのかなと思う。桑井さんの実感としてはどうか。
- 桑井) 確かに積極的にやっていると感じる。以前に町出身の現役オリンピック選手が5人揃って、写真が撮れたのも奇跡であった。今後、それを有言実行できればよいと思う。
- コ) どんなことで呼ばれることが多いのか。
- 桑井) 町内では学校での授業で2回とイベントのトークショーで1回。そのほかに、帯広市のトークショーとか十勝管内でのイベントとかに呼ばれたことがある。
- コ) 今回の会議で大きなテーマとして、5人のオリンピックを幕別町はどのようにまちづくりに生かせるかと考えている。アンケートの結果で、意外とオリンピック5人全員知っている人は少なかった。決してみんながオリンピックを目指すわけではないが、これほどオリンピックがいるという特徴は大きい。呼ばれる立場として、何かこんなことができたらいいなと思うことはあるか。
- 桑井) お祭りとかで5人揃ったら面白いと思う。高木姉妹はもとより、福島選手は何年も前から日本を代表とする短距離界のエースであるし、山本選手はオリンピックを3回出場している。私はまだオリンピック出場が1回であるので、他の選手には及ばない。今回の学校訪問で、最初に行った札内南小学校は6年生だけであったが、全児童ができればいいなと思った。ラグビーを知らない子もいたし、私を知らない子

もいた。自分が子どもたちと触れて、頑張ろうという気持ちを持ち活躍できれば、テレビとかに出た時に子どもたちがあの人にそういえば会ったと思えばベストだと思う。

コ) 積極的に子どもたちと触れ合いたい。

桑井) 時間があれば触れ合いたい、なかなか時間の都合上、難しい。

コ) オリンピアン5人が集まる意義は大きいという話があったが、皆さんどう思うか。応援するという観点になるかもしれないが、何かこれをうまく活用するという意見はないか。

オ①) 本人にちなんだ種目の大会名に冠をつけて、大会や試合をする。また、その大会や試合に本人が出場する。体験だけでなく、実際に試合を試してみるのも面白いと思う。そうすると、オリンピアンがより身近に感じるようになると思う。

コ) 本人の時間との兼ね合いとなるが、出場できれば面白いと思う。幕別町の女子ラグビー選手はどれくらいいるか。

桑井) 十勝ラグビースクールに町内の小学生2人ぐらいいると聞いている。男子と混ざって練習している。

コ) 5人のオリンピアンの種目の中で、女子ラグビーは、日本での競技人口が一番少ないと思う。女子ラグビーの人口が増えて、幕別町に桑井さんというオリンピック選手がいるという打ち出し方と、そもそもどの種目であってもオリンピック選手がいるから子どもたちが何でもスポーツに触れ合い、オリンピック選手を知っているという打ち出し方ではどちらがよいか。

桑井) 一つのスポーツにこだわらず、いろんなスポーツをやってほしいと思う。今までのオリンピックと違う種目でオリンピックが輩出できたら、すごくうれしい。

メ⑤) 限定したスポーツではなくて、いろんなスポーツの幅をあった方がいい。今、町内の小学生で、世界レベルで活躍しているトランポリンの選手がいる。限定した競技というより、スポーツの町というイメージの方がよい。

コ) 学校訪問やトークショーとかしているが、アンケートではなかなか結果が伴っていない。まさに今回のテーマになるが、何をすれば、みんながオリンピアン町と思えるか。それは、前回のワークショップの意見で、オリンピアン町としてスポーツの裾野を広げるといことになるのか、もしくは常にトップアスリートが出続けることがオリンピアン町となっていくのかということになるが。

オ③) 町の人口27,000人のうち、オリンピアン5人いるという現実を突破口として、オリンピアンに協力してもらいながら、オリンピアン町としての切り口を考える。例えば、先ほどの意見であったように、お祭りで5人集まることも一つの切り口として、幕別町の認知度を高めることができる。そのことにより、周りからの見目が変わってくるので、いろんな行事がやりやすくなるし、何かやるとその反響が出てくると思う。

- コ) 5人いるということに何か生かすことができないか。
- メ③) 私の息子が小学6年生で、今日、桑井さんの授業を受けてきた。先週、学校の先生からオリンピック選手が来ることを知らせており、自分は桑井さんを知っていたが、息子は桑井さんを知らなかった。また、息子はラグビーすらも知らなかったので、体育館で何かをするぐらいしか聞いていなかった。今日、学校から帰ってきて、息子にどうだったと聞いてみたら、ラグビーをやって、楽しかったと答えていた。息子はまだまだスポーツに興味がなく、中学に進学して何かスポーツをしなければならぬかなと感じている。今回、ラグビーに触れ合えたことで、オリンピック選手がいることも知ることができた。5人のオリンピック選手が揃うことは難しいかもしれないが、こういうチャンスが増やして、テレビや新聞紙に取り上げられ、周りにオリンピックを知ってもらうことの地道なことを繰り返すしかないのかなと思う。
- オ④) 5人揃うことは難しいので、いきなりそれを前面に出すよりも、町とオリンピックを連想できるような取組みを何かできればいいなと思う。オリンピックといえば、何を連想できるのかなと思うと、あまり良い話ではないが、ドーピングの話題がある。例えば、あまり認知度は少ないかもしれないが、市販の頭痛薬やかぜ薬の中でもドーピングに引っかかるものとそうでないものがあり、それを判断できる薬剤師がいる。その判断できる薬剤師は幕別町に結構いると思う。ドーピングを判断することができる薬剤師がいるということをスポーツやオリンピックに関連付けするなど、目先を変えた取組も必要であるかもしれない。あまりこのような取組をしているところはないので、幕別町内に潜在しているものをアピールしてみるのもよいかもかもしれない。
- コ) 情報を発信する立場で、5人集まることは情報の価値としての意義は大きいか。
- オ②) なかなかスケジュールを合わすことは難しいが、話題性としてオリンピック5人集まることはメディアの露出も非常に多かった。オリンピック複数人が集まると情報の発信が強まると思う。私を感じたこととして、幕別町のオリンピックは長年現役選手として活躍している選手が多いことである。30代になっても、第一線で活躍されていることが最近注目している。先ほど桑井さんから食べ物の話題があったが、もしかしたら、小さな頃から食べてきたものの栄養素とか、元々体が丈夫であることとか、何かしらの要因があると思う。長年現役選手として活躍しているオリンピックの町として打ち出すことで、アスリートではなくても、30代・40代でもものすごいパフォーマンスができるという手本ができたらいいい。今、SNSでカウント数が増えるテーマは、ぶっちぎりに「美容」と「健康」である。アスリートがこのような食事・生活をする事で健康になりましたといった検索で、カウント数を増やしているケースもある。幕別町は健康に気を配っているので、アスリートが輩出しているという切り口も一つかなと思う。私たちがホームページやSNSに「食べ物」についてアップすると、フォロワー数が伸びる。今までスポーツに興味なかった人でも

違う観点から見てきて、スポーツ、オリンピックにつながっていくのもいいかなと思う。

コ) 1回目のワークショップでどうして5人のオリンピックが輩出したのだろうかという話題に上がった。そのときは、偶然であるとメンバーからの答えであった。新聞とかでもなぜ輩出することができたのかというのを書かれているが、その要因はなかなか掴めていない。幕別町には自然にスポーツができる環境と食、パークゴルフなどの遊びの場があると桑井さんが答えているが、このほかに他の町とは違うことはあるか。

桑井) 関東に行くと、まず、そのような場所がない。家に閉じこもる、ゲームをする、スマホや携帯ゲームをいつも触っている人が多い。私たちラグビーをやっている人でさえ、ラグビー以外のスポーツをしている人もいるかもしれないが、ラグビー以外に外へ出る人は少ないと思う。ゲームをする文化に慣れてきたのもかもしれない。

コ) 今の幕別町の子どもはどうでしょうか。

メ③) 冬休みに入るときに、校長先生から冬休み中は必ず1日1回外へ出るようにと指導された。息子はそれを忠実に守り、家でゲームをしていても、校長先生の話を出して、1日1回は外に出るようになった。子どもは、親の言うことを聞かないのに、校長先生の言うことは聞いていると感じた。夏休みは、家で籠りつきりにならないように、エアコンを入れない時間を設けるようにした。家で籠りつきりでききりめらるより、外に出るきっかけをつくるのが大事であると感じた。

コ) 1回目に示したアンケート調査の結果で、週1回以上スポーツ・体を動かしている幕別町の子どもの割合は、全国平均とあまり変わらない。スマホとかゲームとかの環境は、教育委員会としてどのように考えているか。

事) スマホやゲームを一斉に制限するということはないが、PTAの中でも話題に挙がっている。スマホやゲームはルールを守ってやりましょうといったPTAからの通達があったと思う。教育委員会としては、教育の日である毎月19日に、ノーテレビ・ノーゲームデーと合わせて、スマホも触らないようにしましょうと推奨している。

コ) 東京にノーテレビ・ノーゲームデーの話をする、ものすごくびっくりしていた。他に5人揃って、オリンピックの町として、何か切り口にするのではないか。

メ①) 目標はオリンピック出場というのがあって、それに入るか入らないかという最中に、夏のオリンピックを目指す選手と冬のオリンピックを目指す選手で季節や時期が違うので、5人集めることは難しいと思う。引退しているのであれば別ではあるが、イベントで集める無理ではないかと思う。

コ) ラグビーのオフ期間は、決まっているのか。

桑井) オフ期間は特に決まっていない。スケジュール表を渡されて、たまに1週間オフ期間があるというような感じであるが、基本的にその期間でもクラブ活動は行っているので、自分の心と体と相談して、オフの過ごし方を判断している。

- コ) 今までの話を聞いて、オブザーバーとしての意見はあるか。
- オ⑤) 少しでも何かしらの形でイベントとして続けていければいいと思う。皆さんの話にあるとおり、5人全員集めることは現実的に難しいが、難しいからあきらめるのではなく、過去にオリンピック選手として出場した方でもよいので、何かしらのイベントを前向きに考えていくほうがいい。今日は桑井さんに出てきてもらっているが、他の選手にも来ていただければ、これからの子どもたちのために役に立つものだと思う。
- コ) ちょっとここで今日の話をしりぞけていきたい。桑井さんから「食事管理」、「健康」がキーワードになる話があった。メンバーから、幕別町にはオリンピックとして長年活躍されている選手がいる町としての打ち出し方ができるのではないかという意見があった。また、5人のオリンピックがいるという特徴は他の市町村にはなかなかないので、いかに5人のオリンピックを切り口にして生かすことができないかという観点から、5人のオリンピックを揃えることは時間的な調整が難しいが、選手の冠をつけた大会の開催や祭り・イベントに参加してもらえないかという意見があった。ほかに、スポーツ以外にもオリンピックとのつながりを見つけてみてはどうかという観点では、例えば、ドーピングの検査員や薬剤師を活用して、この市販の薬を飲むとドーピングに引っかかることをオリンピックに連想させていくことができないかという意見があった。今までのアンケートの中で、そこまでスポーツの実施率やオリンピックの関心が高いわけではないという結果を踏まえて、ワークショップのテーマである「オリンピックの町を生かしていくために何をしていくべきか」を深く考えていきたい。私が思っていたこととして、東京に戻って、幕別町に5人のオリンピックがいることを周りに言うと驚かれるが、すぐに「何で」と問われる。自分もその問いを考えてみても、確かに食の影響はあると思うが、なかなか分析までできていなくて、ぜひ5人のオリンピックがいる間に、大学へ研究してもらえれば、幕別町とオリンピックの関係を論文のテーマとして、5人いるということの付加価値がつくのではないかと考えていた。
- オ②) 地元新聞社では、札幌医大と連携して、健康についてのセミナー、がんの特化した講演会、健康についてのラジオ番組などを実施している。私が幕別町と一緒に仕事をしているもので、道内出身のバスケットボール選手が町内小学生と一緒にバスケットボール教室をして、その後に食育事業をするものがある。そのバスケットボール選手に幕別町産のきな粉の成分にあるプロテインを使用し、選手専属の管理栄養士が選手の疲労度合などをデータ化している。先ほどの話にあったとおり、幕別町の食とオリンピックの関係性を大学で研究するというのであれば、それなりの費用はかかるので、出資する団体があればいいと思う。その研究結果が雑誌や新聞に載ると、一気に幕別町の名が広まると思う。

メ⑤) 以前に提出されたデータを見て、5人のオリンピックが輩出した要因に何か結びつかないかなと感じた。桑井さんからの話を聞いて、確実なものがあると思うのは、具体的に「送迎」、「食」、「施設」の3つである。その3つがなかったら、桑井さんはオリンピック選手として出場していなかったかもしれない。他の4人も共通していることなのかなと思う。このような素地は他の地域になくて、十勝・幕別の強みであるかもしれない。

桑井) 食という観点で、5人のオリンピックが共通して、町内にある飲食店に行ったことがあるというのがあれば面白い。もしかすると、5人共通して、同じものを食べていたということはあるだろうし、それが何かにつながっているのかもしれない。

コ) そのようなことがあれば、面白いですね。

メ⑤) 例えば、良質なたんぱく質があるとか。豆、豚丼、肉、野菜とか

メ③) 自分たちで畑を作ったりとか、農家から戴きものをもらったりするのが多い地域なので、スーパーで買うよりも、質の良いものを手に入れやすい環境にあると思う。

コ) 町民の健康寿命は長いのか。例えば、要介護認定率とかはどうか。

傍聴) 介護率は全国平均から見ると高い。また、検診の受診率は管内で一番低い。

コ) 確かに十勝は車社会で、日常的に歩く時間は非常に少ない。私が考えたオリンピックの輩出要因の分析についての話題を挙げたが、ほかに何かないか。

メ⑤) 打ち上げ花火のような単発的にならないような取組みを考えるべきだと思う。そのような取組に対して、お金を投入すべきである。イベントはその一つにあたるが、毎回単発的に終わらせるのではなくて、地域や住民を巻き込んだ体制づくりや役割分担をもっとはっきりさせて、行動に移す形になればいい。いろんな理想があっても、結局予算（お金）がないと物事が進まないのだから、イベントでお金がかからない方法や企業、個人からお金を募るとかの方法を考えてみてもよい。

コ) 町にはそのような基金とかあるのか。

事) まちづくり基金はふるさと納税分も含まれており、その基金の目的の一つに未来のオリンピック選手を育てる事業がある。

メ②) 道職員と話す機会があつて、それほどお金を出さなくても、いろいろなつながりでアスリートと呼ぶことができると聞いた。特に北海道出身だからという名目があるようである。もし、今後、いろんなイベントでアスリートと呼ぶようであれば、北海道や他の自治体とのつながりから引っ張っていければよいと思う。

コ) 北海道や他の自治体と意見交換を持つことはあるか。

事) 北海道はアスリートと呼ぶためのサポートをするという情報はもらっている。帯広市は、スポーツに力を入れているので、担当者とは逐次意見交換をしているところである。

コ) ほかに何かアイデアとかはないか。

- メ④) 機会があることに、対象者の幅を広くしてアピールしていかないと今後広がっていかないと思う。
- オ⑤) 昨年のオリンピックで大きく盛り上げることができたが、それを継続的に行うために、例えば人が大きく集まるイベントの一つに産業まつりがあるが、その祭りの中でオリンピックを呼ぶための受け皿としての実行委員会を立ち上げれば、毎年、継続的に行う方法もあると思う。もし、その日に来られない選手がいれば、また違うイベントで触れあうような機会を設ければよいと思う。
- コ) 時間もあと残りわずかなので、本日の資料を事務局から説明してください。
- 事) 資料①は、農業者トレーニングセンター、札幌スポーツセンターの概要と健康講座やトレーニング機器の種類を示している。資料②は、農業者トレーニングセンター、札幌スポーツセンターの使用状況を示している。資料③は、保健課で実施している健康ポイントラリー事業を示しており、3月15日までの事業なので、ぜひ参加をしていただきたい。資料④は、前回ワークショップでのアンケート結果である。
- コ) 傍聴者も含めて、健康ポイントラリー事業をやっている方はいるか。(メンバー1人挙手) この健康ポイントラリー事業は、検診とスポーツ・運動をセットにしたものであると思うが、効果としてはどうか。
- 傍聴) 昨年度は検診に受診することで達成したもので、受診率の向上に一定の効果はあった。今年度は検診と運動を絡めた事業で実施しているものであるが、達成者は昨年度から比べて格段と少なくなっている状況である。
- コ) 後半の話を振り返ってみたいと思う。
- ・オリンピックの輩出要因を大学などに研究対象として考えられないか。
  - ・打ち上げ花火のような単発的にならないように、民間や個人から寄付を募ったり、まちづくり基金を活用したりする方法や他の自治体や北海道との連携が必要であること。
  - ・産業祭りのときに毎年オリンピックの誰かに来てもらい、祭りの価値の向上とオリンピックの醸成につなげる。
- このほかに何かあるか。
- オ②) 幕別町の学校の中でオリンピックに関する授業や勉強をする授業はあるか。
- 事) あまり聞いたことがなく、今日の学校訪問事業しか思いつかない。
- メ⑤) 文科省からオリンピック・パラリンピックのことを知るための資料は各学校に配布されているはず。ただ、学校の現場ではやらなければならないことが一杯なので、一つの資料として保管されているのかもしれない。文科省からはオリンピック・パラリンピックについての授業材料として、提案されている。
- コ) 私の子どもの学校では、総合学習の時間を使い、オリンピックの歴史を壁新聞として3～4時間の授業を行った。たぶん東京オリンピックに向けてのものであるため、単発のものなのかなと思う。

オ④) 5人のオリンピックも練習現地で情報発信ができるようなものがあればよい。皆さんが食べている〇〇飯みたいなものも情報発信できれば面白い。

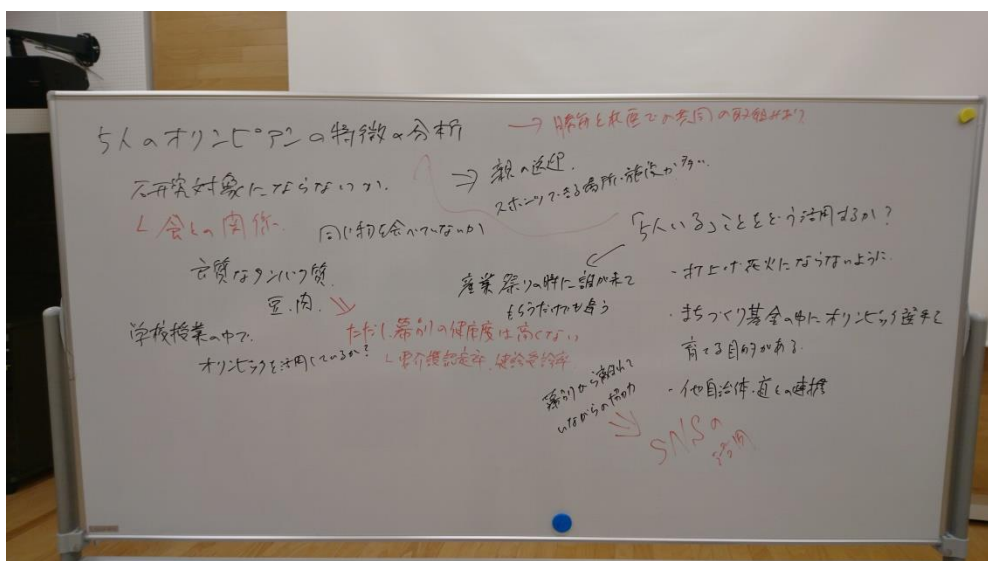
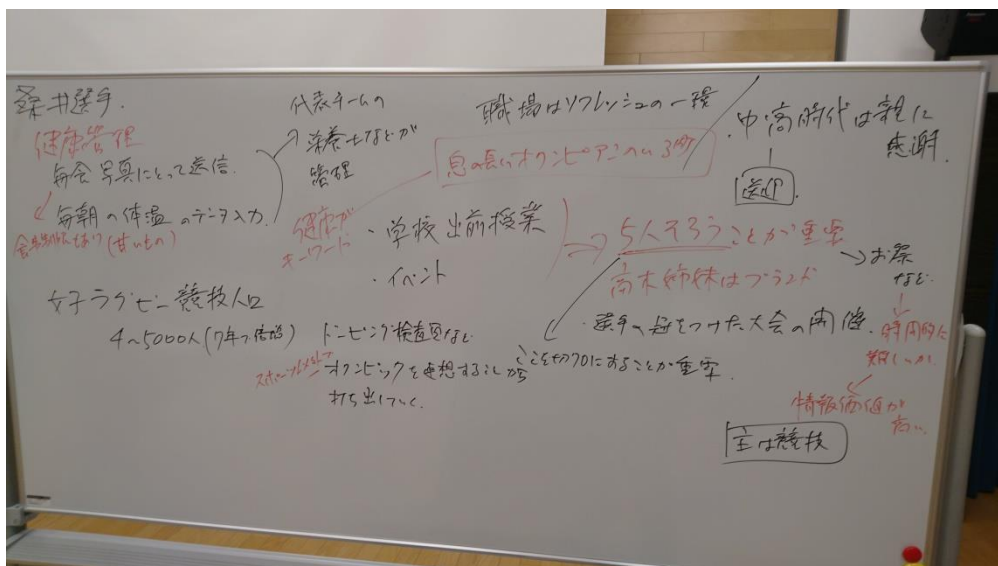
コ) 桑井さんはSNSはやっているか。

桑井) どれもやっている。最近、幕別町で公式SNSを始めたので、幕別町での観光情報や応援情報をSNSで拡散するようにしている。他の選手も同じくSNSを持っているので、情報発信はしていると思う。

コ) 最後に桑井さんから一言。

桑井) このような機会に参加できるとは思わなかったのですが、皆さんの意見を聞いて、すごく純粋にまた違う視線から見ることができた。本当にオリンピックに出ることが一番であるが、幕別町に生まれて育って、オリンピック選手になれたのも自分にとって嬉しいことである。幕別町がオリンピックの町になれるように、また協力できることがあればぜひ協力したい。

### ホワイトボードの写真



コ：コーディネーター、桑：桑井氏、メ：メンバー、オ：オブザーバー、事：事務局、傍聴：傍聴者